

FROM BLACK 1
～ドS極道の甘い執愛～

Satoi & Hazuki

桔梗 楓

Kaede Kikyo

eternity



エタニティ文庫

もくじ

フロム ブラック FROM BLACK 1 ～ド ^{エス} S極道の甘い執愛～	5
愛より深い、果ての黒	293
書き下ろし番外編 ひみつのダイエット	341

フロム ブラック
FROM BLACK 1
～ド^{エス}S極道の甘い執愛～

第一章

緊急事態である。

私、椎名里衣がこの世に生を受けて二十年。二年前、育ての親だったおじいちゃんを亡くし、家族と呼べる人がいなくなった私は、高校卒業後に田舎から都会に出た。就職した会社は、なんの因果かブラック企業。仕事を辞めたいと思いつつも社長が怖くて辞められず、営業として馬車馬のように働いている。

この二年、数々の修羅場をくぐり抜けてきた。けれども、ここまでのピンチに出くわしたことがあっただろうか。いや、ない。

「これは酷いなア。ほら見てみるよ、バンパーがベッコベッコだわ。これはなアんも言いつてきねエなア？」

「ぶつかって来た時は、チンピラが喧嘩でも吹っかけて来たのかと思つたつスねー」

「確かにそれくらいの勢いがあつたよな、ははは」

そう言いながら追ってくる三人組は、とてもガラが悪い。危険な雰囲気をおんぶんぶ

せていた。

一番はじめに口を開いたのは、スキンヘッドに蛇骨の刺青が入った男で、次はワインレッドのシャツに黒ネクタイという、ホスト風の茶髪の男。最後のひとは、逆三角形の黒いサングラスにアロハシャツを着た男だ。

はつきりわかる。この人たちはタチが悪い人種だ。まったく関わりたくないタイプだけれど、今こうして私が絡まれているのは、自分のせい。

ここは国道で、日はとっぷり暮れている。

数分前、私は社有車に乗って、営業先から会社に戻っていた。そして、あるうことか接触事故を起こしてしまったのだ。

連日のサービスクラスで疲労もピークを超えていたのか、赤信号で停車中、ブレーキを踏む力を抜いていたらしい。ハッと気づいた時には、目の前の車にゴツツとぶつかって来た。

慌てて外に出たら、ぶつけた車からもぞろぞろと人が出てきて——それが、先ほどのセリフを放った三人だ。

黒塗りの高級車。黒フィルムの貼られた窓。ガラのよくないお兄さんたち。

その情報だけでわかる。この人たちはいわゆる『ヤ』がつく職業なのだろう。

そんな三人が、ポケットに手突っ込んで顎を突き出し、私を囲い込んでいる。信号

はすでに青になっていたが、周囲の車は私たちを避けて走っていた。

信号の目の前で停車し続けているのに、クラクシヨンも鳴らされない。おそらく、あの様子はヤバイとみんなわかっているのだ。君子危うきに近寄らず——と。

男たちはまるで肉食獣みたいに私を見ている。この女をどう料理してやろうか、と考えているのだろう。

私지가ガタガタと震えて身を縮こませていると、ふいに黒塗りの車のドアがガチャリと開き、黒いストラックスに包まれた長い脚が現れた。

新たに出てきたのは、驚くほど眉目秀麗で長身の男だった。柔和な笑みを浮かべ、眼鏡をかけている。

スキンヘッドの男が、振り向いて彼に声をかけた。

「獅子島」

獅子島と呼ばれた男は、ゆるやかに眼鏡のブリッジを押し上げる。

「まあまあ、そんなに威嚇しては、彼女も畏縮してしまうでしょう。可哀想に、震えていますよ？」

彼は穏やかな笑顔で、気味が悪いほど優しく目を細めている。彼の言葉に三人の男たちの雰囲気（やむ）が和らぎ、ふっと肩の力が抜けた気がした。

この人たちはヤがつく職業の方々みたいだけど、獅子島という人は、比較的優しいの

かもしれない。ひよつとすると、このままお咎めなしで解放してくれるのかな。そんな期待を持って見上げると、彼はにっこりと笑みを向けてくる。

「とりえず移動しませんか？ でないと、いつまで経っても取るものが取れないでしょう。大事な車を傷つけてくれたのですし、ちゃんとあなたの誠意を見せてもらわなければ、ね？」

優しく、いっそ甘いと見えるほどの猫撫（ねこな）で声で、男は悪魔のようなことを口にした。

顔が引きつり、身体がいっそうがたがたと震える。やっぱり獅子島も、ヤがつく職業の人なのだ。本当に、私はどうして、よりにもよってこんな人たちの車に社有車をぶつけてしまったのか。これが運命なのだと思ったら、相当不幸な星のもとに生まれてきたのだと思えない。

私は社有車の後部座席に押し込まれた。隣にはスキンヘッド男がどっかり座った。そして運転席にアロハシャツ男が乗る。逃げたくても、わずかな隙も見つからない。

黒塗りの高級車には、茶髪と獅子島が乗り込んだ。社有車は走り出し、路地に入って小さなコインパーキングで停まった。黒塗りの車も隣に停車する。

スキンヘッド男に促（うなが）されて社有車から出る。夜のコインパーキングは、まるでスポットライトのように白い防犯ライトに照らされていた。

「ご足労いただき、ありがとうございます。さて、これはまた派手に傷がつかましたね。後ろのバンパーがすっかりへこんでいます。修理に幾らかかるでしょうか」

男たちに囲まれた私に、獅子島が話しかけてくる。しかし私は答えるところではない。とにかく警察に連絡しなければ。震える手でポケットから携帯電話を取り出すと、あつという間に取り上げられた。

しまった！ 隠れて電話するべきだった。

携帯電話を掴んだ獅子島は、ニツコリと微笑む。私は顔から血の気が引くのを感じた。

「あの……」

なんとか声を絞り出すと、獅子島が「なんですか？」と返す。

「しゅ、しゅうりだいは、おいくらくらいかかるんでしょうか？」

この際、多少ふっかけられてもいい。それよりも、さっさとお金を払って逃げたい。

しよせん、彼らの目的はお金なのだ。数十万なら、なんとか貯金で賄える。

獅子島はふむと相槌を打ち、顎に指を添えて、スキンヘッドの男に顔を向けた。

「お幾らくらいでしょうね。桐谷、わかりますか？」

「そーだなア。バンパーの交換、塗装、内部点検も兼ねるとなると、まあいいお値段になるんじゃないか？ 車だけで二百万くらいか」

「にひやくっ!？」

声が裏返る。いやいや、ない。どんな高級車でも、バンパーをへこませただけで二百万だなんて。

ぱくぱくと口を動かして、声にならない悲鳴を上げていると、アロハシャツの男が黒塗りの車をべしべし叩いた。

「直すのは車だけじゃないよ。ぶつかった時、強い衝撃を感じたからさあ。もしかしたら首を痛めてるかも。治療費も出してくれないと、割に合わないよね」

「それに修理に出す間、車がないとなると仕事に支障が出るし、病院通いするにも時間がかかるし、慰謝料も払ってもらいたいっすねー」

茶髪男まで乗ってくる。

獅子島に桐谷と呼ばれたスキンヘッドの男は腕を組み、威圧的に私を見下ろした。

「まあ、諸々の費用を合わせると、ザッと計算して七百万くらいかな」

「なっ……!？」

目玉が飛び出そうになる。七百万ってなんだ。新車一台を余裕で買える値段じゃないか。唾然として立ち尽くしていると、桐谷が心外そうな表情をした。

「割と良心的な金額だぞ。俺の知り合いは、車を軽く擦られただけで、千二百万くらい巻き上げたし」

「それはまた、実に金払いのいい人に巡り合えたのですね。うらやましい話です。きつ

と上手に話し合いをされたのでしょうか」

そう言ったのは獅子島だ。

「相手が手を打つ前に、免許証と勤務先と住所を押さえたからな。妻子がいると簡単に払ってくれるし、家族さままだよ。ははは」

ほがらかに笑い合う獅子島と桐谷。しかし会話の内容はどう聞いても笑えない。

どうしたらいいのか。携帯電話は取り上げられてしまった。夜の帳が落ちてあたりは暗く、人の気配はない。ここで大声を上げたところで、駆けつけてくれる人はいいるのだろうか。それよりも私が声を上げたことによって、目の前の男たちが激高する可能性のほうが高い気がする。

私が思考を巡らせていると、獅子島があらためて声をかけてきた。

「さて、お嬢さん。七百万が相場だそうですが、今すぐ払えるとおっしゃるなら、示談成立。今回の件はなかったことにしましょう。しかしその表情を見るに、どうやらお金を用意するのは難しそうですね？」

力なく、こくと頷く。どうしよう。どうすればいいんだ。私がぼんやりしていなければ、こんなことにはならなかったのに。

自然と顔は俯き、黒いアスファルトをジツと見つめる。涙は出ない。泣いたところで、この人たちは許してくれそうもないが。

獅子島は楽しそうにくすりと笑う。

「さて、お金がないなら困りましたね。とりあえず財布を預かりましょうか」

「へっ、あ、はいっ」

はじまった。いよいよ私はカスカスになるまで搾り取られるのだ。獅子島は優しい表情を浮かべているが、やっていることは極悪である。顔のよさや物腰の柔らかさに騙されてはいけない。

そろりとポケットから財布を取り出し、獅子島に渡す。抵抗したところで奪われるだろうから、今は言う通りにしておいたほうが利口だ。

使い古された私のお財布は、黒の柔らかい革製。刻印のようにデザインされた花柄が気に入っている。高校の入学祝いにおじいちゃんが買ってくれた一品ものだ。

獅子島が財布を開くと、ファスナーにつけているお守りが揺れた。これもおじいちゃんにもらった交通安全のお守りだ。交通安全……効かなかったよ、おじいちゃん……

「うーん。思っていたよりも赤貧な方ですね」

獅子島の言葉に、三人の男たちも私の財布の中を覗き込んで、声を上げる。

「うっわ、これはひどい。まさかこれ、全財産じゃねえよな？」

「そんなわけあるか。でも今時珍しいな。クレジットカードが一枚もないぞ」

「後はポイントカードとレシートだけか。しょぼいなー」

言いたい放題である。クレジットカードはなんとなく持つのが怖くて、作っていない。確かにお財布の中には千円札一枚しか入っていないが、私は必要な額しか持ち歩かないだけで、アパートにはまだ幾らかお金がある。もちろん銀行にも。さすがに七百万はないけれど。

「どうする？ コレ、売れるかな」

私を親指で示しながら、不穏なことを口にするアロハシャツ。

「顔はたいしてよくねエからなア。かといって身体がイイわけでもねエし。繁華街で小銭を稼ぐくらいにしか、使い道ねエだろ」

スキンヘッドの桐谷は、私の頭からつま先までを値踏みするように眺めて、言いたい放題言う。余計なお世話だと思ったが、口には出せない。

獅子島は、困ったように腕を組んだ。

「ふむ。商品としては今ひとつのようですね。ですがこちらとしても、払うものは払っていた方がいいですし、ここはひとつ、セオリーとは違う使い方をしてみましょうか」
財布から抜き出した私の運転免許証を手に、にっこりと笑う獅子島。そして、ゆっくりと言い含めるように、私に話しかけた。

「これは提案ですが、あなた、うちで働きませんか？」

「……え、はたらく？」

獅子島を見上げると、彼は「ええ」と頷き、眼鏡の奥にある目を細める。

「私は会社を経営しているのですがね、前から事務員が欲しかったんですよ。あなたさえよければ、うちで働いてもらい、そのお給料でお金を払ってはいかがでしょう」

ヤクザにしては良心的な提案をしている気がする。金が払えなかったら身体で稼げと言われるのかと思いきや、どうやら仕事内容は単なる事務員のようだ。悪くない。

だが、話には続きがあるらしく、獅子島はニコニコ笑顔で人差し指を横に振った。

「でも、それだけだと私がいい人みたいですよ。だからもうひとつ、あなたに務めを果たしてもらいましょう」

いい人みたいって自分で言わないでほしい。七百万を笑顔で請求してる時点で、まったくいい人じゃないし。

おかしいな言い分をかざしながら、眼鏡の男は笑顔のまま「難しいことじゃないですよ」と言った。

「ただ、私の趣味に付き合ってくださいればいいのです」

「しゅ、趣味ですか？」

「ええ。ひとりではできない趣味を持っていますね。一応いくつかの条件があるのですが、あなたはなかなか素質がありそうです。きつと、私も楽しめることでしょ」

「……はあ」

何を言われているのかよくわからないが、私は適当に相槌を打つ。すると、桐谷が「へえ?」と楽しそうな声を上げた。

「なんだ、獅子島。こういう娘が好みだったのか?」

「ええ。すれた感じのしない真面目な雰囲気が好き。初心うぶそうなところも高評価だすです」

「初心うぶねえ。単に童顔で田舎いなかくさいだけだろ」

何気に私をけなす桐谷。次に話に加わったのは茶髪男だ。

「でも真面目つ子をグチャグチャにする楽しみはありそうっスね」

「別にグチャグチャにしたいわけではありませんよ。真面目であることは私の趣味において大切な要素のひとつなんです。不真面目な人はすぐに墮おちますからね。それではつまらないでしょう?」

なるほどー、と頷く男たち。

私は話がさっぱり見えない上に、嫌な予感がひしひしとしてくる。

そうだ。嫌な予感しかない。獅子島は一見穏やかで優しそうだけど、確実にヤバイ人だ。そんな人が経営する会社の事務員なんて、絶対ろくでもないところに決まっている。

それに、私は大きな問題をひとつ抱えていた。話が盛り上がっているところで水を差すのは勇気がいるけど、これだけは言っておかねばならない。私はおずおずと手を上げた。

「あの……、すみません。あなたの提案に乗るのは、たぶん無理だと思えます……」

そんな私の言葉に、桐谷が「ああ?」と酷ひどくドスのきいた声を上げて睨にらみつける。

はつきり言って、めちゃくちゃ怖こわい。けれどもそんなに凄すごい声でも、無理なものは無理なのだ。私に転職は許されない。否いな、会社を辞めることが許されないのだ。むしろ、辞められるのなら、とっくの昔に辞めている。

会社を辞められないのは、私の勤める会社がいわゆるブラック企業だから。ヤクザとそう変わらない悪辣あくらつな社長のもと、私たち営業は慢性的な睡眠不足を抱えて、奴隷のように働いている。あの社長が私という働きバチを手放すわけがない。

迫力のある睨にらみ顔に囲まれながら、私はたどたどしく自身の境遇を説明した。

——私の働く会社は、とある企業に属する小さなフランチャイズの工務店。住宅のリフォームや耐震工事が主な事業内容で、営業である私は、客から契約をもぎ取ってくるのが仕事だ。その営業方法は訪問販売とテレアポだった。

『常に瀬戸際せとぎわと思え。目標売上は這いつくばってでも達成しろ。まずは身内に売れ』

そんな言葉を聞かされ続ける毎日。

営業は疲れ果てた手足を動かさし、なんのために働いているのかわからないまま、働き

バチのように担当エリアを回る。給料はほぼ歩合制。最低賃金は約束されているが、社長の満足する数字が取れなければ給料泥棒のレッテルを貼られ、地獄の説教と数時間にわたる正座を強いられる。私も何度か目標を達成できなくて、その地獄を味わったことがある。

本当はみんな、会社を辞めたくて仕方がないのだが、社長は全社員の個人情報しょうあくを掌握しやうあくしており、脅迫も辞さない鬼だ。

その鬼の所業を見たのは、元社員が退職しようとした時だった。彼は無断欠勤を繰り返し、退職届を送りつけた。すると社長は、彼の家族や親戚すべてに嫌がらせの電話をし、彼の中傷を書いたピラを自宅周辺にばらまいたのだ。終いに、『辞めたいなら損失金額を払え』と元社員を脅し、ノイローゼになるまで追い込んだらしい。結局その人は、身内から大金を借りて損失金額を払い、会社を辞めた。

逃げれば最後、尻の毛までむしられて泣きを見る。そう痛感した一件だった。

もちろん、公的な相談所に駆け込み、救いを求めるという手立てはある。しかしその後には『アットホームな社風です』って書いてあったのに、毎日が絶対零度ぜつたいれいどの

寒々しい職場である。それらのことを話し終えると、私の向かいでヤンキー座りをしていたアロハシャツ

の男が、「フーン」とかろーく相槌あひづちを打った。そして彼はすばーっとタバコの煙を吐き出す。

そろそろこのあたりの住民が、フラリと夜の散歩に出てこないものか、と周囲を見渡してみる。しかし、ここは本当に都会なのかと疑ってしまうほど人通りがなくて、悲しい。

ぐー、と小さく腹の音が鳴る。夕飯の時間などとつくに過ぎていているし、そろそろ会社に帰らないと、課長から文句の電話が来るだろう。

「なかなかブラックなところで働いてんだねー。苦勞くるわうしてんだな」

「悪辣あくらつでいいじゃねエか。俺はその社長、気に入ったなア」

「最近カタギのほうがち悪いって聞くっスねー」

世間話でもするかのように軽い会話を交わす男たち。ただ、獅子島は会話に参加せず、私の免許証ひんぎょしょうを眺めて黙り込んでいた。

「あの、つまりそういうわけなので、私は会社をすぐに辞めることができなんでしょう。だから、どうか許してもらえないでしょうか。七百万は無理ですけど、修理代は払いますから」

「んーどうする、獅子島。さすがに七百万はやめとく？」

アロハシャツの男が獅子島に声をかける。

ちよっと待て。『七百万はやめとく?』って、やっぱりその金額は、法外にふっかけているって自覚しているんじゃないか。なんてひどいヤクザなんだ、と心の中で憤慨する。

すると獅子島はゆっくりと視線を上げ、私の顔をジッと見た。

「――椎名、里衣」

「え?」

私の名を呼んだ獅子島の視線が、ねっとり身体中にまとわりついた気がする。

奇妙な感覚に思わず身を震わせた。彼は微笑みこそ維持しているが、目が笑っていない。

それなのに、なぜか、嬉しそうに見えた。まるで、ようやく見つけたと言っているかのように。

「私は方針を変えるつもりはありません。あなたには七百万分、うちで働いてもらいますよ。……そうですね、数年と行ったところでしょうか」

「数年! そんなに長い間!」

「では、もっと稼げるところで働きますか? 性風俗店でがんばれば、一年くらいででしょうか。ご希望なら、あなたを紹介しても構いません」

性風俗。そこで一体どのような仕事をするのか詳しくは知らない。けれども、不特定

多数の男性に対して、いかがわしいことをするのはわかる。

……そんなの嫌すぎる。そもそも、どうして私はこんな状況になっているの?

薬にも縋る思いで、私は獅子島に訴える。

「さっきも言いましたけど、私、会社を辞めることが難しいんです。あの社長が許してくれません。あの人はヤクザ相手でも平気で喧嘩を売る人なんです。鬼で悪魔で銭ゲバの拝金主義者なんです。だからどうか私を事務員として雇うことは諦めて、小金で我慢してもらえないでしょうか!」

「ふふ、それでは是非、社長さんにはその悪辣な手腕を振るってもらいましょか」

獅子島は懐からスマートフォンを取り出し、どこかに電話をかけはじめた。私の必死の訴えなど、のれんに腕押し状態で、彼は聞く耳などひとつも持っていないらしい。

「――すみませんね、作業中に。実はひとつ、最優先でやっていただきたい仕事があります。内容は身辺調査。隅々まで洗ってください。対象は……」

言葉を切り、チラリと見るのは私が運転していた社有車。車体に貼られたステッカーには、でかでか社名が書かれており、獅子島はそれを口にする。

「はい。代表取締役を調べてください。……ええ、そうですね。では三十分後に」

電話を終えると、彼は懐にスマートフォンを戻しつつ、黒塗りの高級車の後部ドアを開けた。

「乗ってください」

「……え」

「せっかく見つけた働き手ですから、逃すつもりはありませんよ。このままウチの事務所に向かいますので、乗ってください」

まじですか。アパートに帰ることも許されないのですか。

事態がめまぐるしく進んでいく。もしかして私、大変なことに巻き込まれている？

ゆっくりと状況をのみ込んでいく。自分の立場を、自覚して――

気付けば地面を蹴り、逃げだしていた。このままではろくなことにならないと、本能が察知した。

しかしそんなのは、抵抗のうちにも入らなかったらしい。獅子島はすぐさま追いつくと私の手首を掴み取り、強く引つ張った。そのまま引きずられるように高級車まで連れていかれ、後部座席に押し込められる。

「や、やだ！ 許して。お金なら払うから、何年かけても払うからーっ」

「それはありがたい。是非、私の会社で働いてお金を払ってもらいましょう」

「違うの、今の会社で働いて返すって言ってるの。あなたたちは、お金さえ手に入ればいいんでしょう？ なんであなたのところまで働かなきゃいけないの。性風俗も嫌だけど、あなたの会社で働くのも嫌なのーっ！」

「ここであなたを解放すれば、すぐに警察に駆け込むでしょう？ 桐谷、出してください。曾我と黒部はその車を会社に返しておいてください。黙ってガレージに置いておくだけでいいですから」

「ういっス」

「了解っス」

コインパーキングに残ったアロハシャツの男と茶髪男が返事をする。それと同時に、いつの間にか運転席にいた桐谷がエンジンをかけ、車が動き出した。

「どうして？ パンパーをへこませたくらいで、なぜこんな目に遭わなきゃならないのー！」

「それは厄介な私たちに会ってしまったからですよ。運の尽きだと思って、諦めてください」

「自分で厄介とか言わないで。これって拉致でしょ。警察にバレたら、捕まっちゃうんだからー！」

「ええ、だから捕まらないように、あなたを隠しておかないとね。ふふ、里衣は威勢のいい娘ですから、なかなか楽しめそうです」

私の腕を掴んだまま、にっこりと笑う獅子島。

どうして彼はずっと、穏やかで優しい笑みを浮かべているのだろう。まるで顔に仮面

を貼りつけているみたいだ。そう思った瞬間、身体がぞくりと震えた。

車は淡々と道を走っていく。どうやら繁華街に向かっているようだ。夜の街にふさわしい色鮮やかなネオンがあちこちを照らし、居酒屋やクラブといったお店が見えてくる。車が停まったのは、そんな繁華街の一角。一階がシャッターつきのガレージになっている、コンクリートの三階建ての建物だった。ガレージで停車すると、車から降ろされる。

獅子島に腕を掴まれたまま、私は周囲を見渡した。

住宅という感じはしない。入り口は硝子扉だし、店名の書かれたステッカーが張っている。ある。

「ここ、どういうところなの。ヤクザの事務所じゃないの?」

「まさか。普通の事務所ですよ? ヤクザにも生業は必要ですからね。こう見えて私たちも、真面目に働いているんです」

「う、嘘! だって……、真面目に働いてる人は、こんなことしない!」

二の腕を引つ張られて歩きながら、噛みつくように怒鳴り立てる。

なのに獅子島は、「誤解ですよ」と明るく笑う。

「誰にも迷惑をかけていない。きちんと税金も納めていますしね」

「私はめっちゃくちゃ迷惑してます!」

「それはあなたが先に迷惑をかけたからですよ」

「だ、だからって、いきなりこの仕打ちはない! 車のバンパーをへこませたくらいで、どうしてこんなことになるのよ!」

ばたばたと暴れるが、腕を掴む彼の手は少しも力がゆるまない。

階段を上って二階に着くと、三階へ続く階段と磨り硝子の扉がある。獅子島は右側の扉を開き、中に私を引きずり込む。

——そこは思っていた以上に汚く、いかにも男所帯な、タバコ臭い事務所だった。

フロアは広すぎず、狭すぎず、といったところだろうか。床は土埃にまみれて茶色く、目の前には汚れた応接セットの黒いソファとテーブルがあった。そこに置かれたアルミ灰皿は、吸い終わったタバコでハリネズミ状態だ。左側の壁は一面窓になっていて、その前にはスチールデスクが四つ置かれ、どれも書類の山がいくつもできている。天井を見上げれば、埃であちこちが黒ずんでおり、ところどころに蜘蛛の巣まであった。

なんだこの劣悪な環境。思わず嫌悪の表情を浮かべると、脇から「お疲れさまです」とボソツとした低い男の声が聞こえてきた。

振り向くと、そこにはやたら背が高く、ひよろつとした男がいた。薄汚れたジーンズに、グレーのパーカーを着ている。酷く猫背な上にフードを目深に被っているせいで、

顔の造りがよくわからない。

「滝澤。急に調査を押しつけて悪かったですね」

「イエ、仕事ですから」

獅子島はパーカー男——もとい滝澤の返事に頷くと、私に声をかけた。

「里衣。こちらは滝澤虎雄と言います。桐谷、あなたも挨拶してください」

スキンヘッド男は、ソファでタバコを吸いながら軽く手を上げる。

「……桐谷揚武だ」

最後に獅子島が、にっこりした笑みを向けてきた。

「私は獅子島葉月と申します。よろしくお願ひします」

「はあ……」

全力でよろしくしたくない。しかしそんなことは言えず、曖昧な返事をしておいた。

ふいにジットリした視線を感じる。横を向くと、滝澤がフードの陰から私を見ていた。

これはもしかして、私も自己紹介しなくてはいけない空気なのだろうか。しばらく悩んだ後、口を開いた。

「私は、椎名里衣と言います」

ぺこりと頭を下げる。

シンとした事務所で、天井の蛍光灯がしらじらと私たちを照らす。窓の外から酔っ払

いの笑い声が聞こえてきて、外の世界とはまったく違う雰囲気に居心地が悪くなった。

……自己紹介、しないほうがよかったかな。

私がそんな思いに駆られた時、入り口のドアがガチャリと開く。

「ただいまー！」

「帰ったっス！」

その声で、一気に事務所の雰囲気明るくなる。入ってきたのは、先ほど会ったばかりの男ふたり。茶髪にワインレッドのシャツ男と、逆三角形のサングラスにアロハシャツの男だ。

「おかえりなさい。今、里衣に自己紹介をしていたのですよ。これからは共に働く仲間ですからね」

さらっと言った獅子島に、私はとっさに抗議する。

「ちよっ、私、まだ了承してない！」

「俺は曾我竜也だよ。よろしく、里衣ちゃん」

私の言葉などサラッと流して挨拶したのは、アロハシャツの男。続いて茶髪のホスト男が敬礼するように片手を額に当てた。

「黒部敏だ。これからよろしくな。いやあ、これからは面倒な事務処理をしなくていいかと思うと、気が晴れるな。滝澤もそう思うだろ？」

はっはっは、と笑った黒部は、滝澤の肩をぽんと叩く。滝澤は無言だったが、小さく頷いた。

「さて、全員揃ったことですし、さっそく滝澤の報告を聞きましようか」

小さく話を進める獅子島さん。私は慌てて彼のスーツをぐいっと引っ張った。

「ちょっと勝手に話を進めないでよ。大体、社有車がいつの間にか会社のカレージに置かれていて、運転していたはずの私がいらないなんて、どう考えても事件じゃない！ 今頃きつと警察が——」

「心配なさらなくても大丈夫ですよ、里衣」

「心配してないです！ わ、私を誘拐ゆきわなんてしたら、警察が絶対に動くって言うてるの。大事になる前に解放したほうが、身のためだよ」

「残念ながら今の警察はこれくらいでは動きませんよ。それに、あの会社はもうすぐあなたに構っていらなくなりますから」

にこにここと笑って、不穏なことを言う獅子島。

一体どういう意味だろう。思わず眉をひそめると、滝澤がポケットからスマートフォンを取り出し、操作をはじめた。そして口を開く。

「株式会社リフレトラスト代表 渡島健次郎。五十二歳、バツ一。無類のギャンブル好きで、多額の借金を抱えている。ヤミ金にも手を出していた」

「……え？」

リフレトラストは私が勤めている会社で、渡島は社長だ。しかし何を言われているのか理解できず、首をかしげる。

そんな私をよそに、滝澤はスマートフォンを片手に淡々と『報告』を続けた。

「カネは現在返済中。自社の利益に手を出している」

「なるほど。会社のお金を着服して、ヤミ金の返済にあてているんですね」

——借金、ヤミ金、利益の着服……着服？

滝澤の言葉を脳内で整理していて、思いつき引つかかった。

「ま、待って、あの社長、うちの会社の利益を着服してたの？」

戸惑う私の言葉に、滝澤はコクリと頷く。啞然とする私。しかも、滝澤の報告はまだ続く。

「内縁の妻と同居している。女はスナックの経営者。四十五歳、バツ二」

「ふむ、セオリー通りの小者ですね。これなら簡単に潰せそうです」

「つ、潰す？」

物騒な発言に目を丸くする。獅子島は「ええ」と事もなげに頷いた。

「あなたが自主的に会社を辞めることができないのであれば、会社ごと潰すしかないでしょう？ どうせブラックな会社なんですし、困る人なんて、社長さんご本人くらいし

「かないのでは？」

「そ、それは……」

言い返せない。確かに、社員はみんな辞めたがっているし、モラハラに悩まされてへとへとだ。だけど、そんなに簡単に話が進むのだろうか。会社を潰すなんて、決して容易じゃないはず。

しかし獅子島はニコニコした笑みを崩さず、私の背中を軽く叩いた。

「里衣はなんの心配もなくて結構ですよ。すべて私のほうで片付けておきますからね。とにかくあなたは、ここで七百万円分働いてくださればいいのです」

「待ってよ！ その七百万って、正当な金額じゃないよね？ 単なる言いがかりでしょ！ どうして払わなきゃいけないの！」

「ふふ、法にのっとった請求書が欲しいのですか？ それでしたら後日、いくらでも用意して差し上げますよ。ですがこのままだと、あなたはいつまで経っても隙を見て逃げ出しそうですね。かといって、四六時中監視するわけにもまいりませんし……」

ふむ、と困ったように腕を組む獅子島。やがて、名案を思いついたと言うようにポンと手を打った。

「里衣、ふたつ選択肢を差し上げましょう」

「選択肢？」

「はい。監禁か軟禁、好きなほうを選んでください」

な、何を、言っているんだらう、この男は。

「どっ、どっ、どういう意味？ か、監禁か軟禁って！」

「監禁を選んだ場合は、その倉庫で生活と仕事をしてもらいます。軟禁を選んだ場合は、この上にある私の部屋で生活して、日中はこの事務所で仕事をしてもらいます。当然ですが、私の許可なしで外出することは禁じます。電話で助けを求めるのもだめですよ？」

にこにこ獅子島が説明するが、うまく理解できない。ただ、彼が私に究極の選択を強いているということはわかった。

「い、いくつか質問があるんだけど、まず、倉庫って何？」

『おちつけ。里衣、おちつけ』と心の中で繰り返しつつ、思いついた質問を投げてみる。すると獅子島は楽しそうに微笑み、すっと人差し指で事務所の一角を示した。応接セットのすぐそばだ。

「あそこです」

そこにあるのはスチールドア。曾我がガチャリとドアを開けてくれる。

その部屋の中には、段ボールやガラクタが詰め込まれていた。広さは六畳ほどだが、物が多すぎて足の踏み場がない。

「こ、こんなところに監禁されたら、寝る時はどうしたらいいの！ あとトイレとかお風呂とか！」

「誰かがいれば出して差し上げますが、いなかったら我慢してください。お布団は用意してあげます」

待て。我慢なんて無理です。人間の生理現象はどうかできるものじゃない。

私は啞然として倉庫を眺めてから、ギギと獅子島に顔を向けた。

「もうひとつ質問なんですけど……、た、例えば軟禁を選んだとして。あなたの言葉を無視して逃げたり、電話で助けを求めたりしたら……私をどうするのでしょうか？」

オドオドと問いかける。すぐ聞きたくない質問だったが、聞かないのも怖かった。

獅子島はまるでその質問を待っていましたとでも言うように、満面の笑みを浮かべる。

「私は、周りの人たちに、執念深いと言われてしまってますね」

「はあ」

「一度恨んだ相手は絶対に忘れません。女性でも容赦するつもりはありません」

「と、言いますと……？」

「つまり、一時的に警察で保護されたとしても、私はあなたを逃がすつもりはない。警察の保護が解けたら、すぐに捕まえて完全に監禁しますね。ただ閉じ込めるだけでなく、逃げられないように物理的な処置をします」

指をふりふり揺らして、獅子島は酷いことを言う。

「あ、あの、物理的な処置って、どういう？」

「一応、私も長くこの世界にいますので、逃げ切るのは不可能だと思ってくださいね」

「質問に答えてー！ 物理的って、何をどうするの!? 私に何をするの!？」

必死になって問い質すと、獅子島は眼鏡のブリッジを指で押し上げ、「内緒です」と言った。

「わからないほうが恐怖心を煽るでしょう？ そうなった時のお楽しみ、ということにいたしましょう」

「お楽しみ!？」

私はまったく楽しくない。そして、完全に逃げ場をなくした気分だった。

車のバンパーをほんの少しへこませただけで、怪我人もない。本来なら、警察と保険会社に電話するだけですべて解決するような些細な事故で、私はこんなところに囚われるのか。

……すべては、関わった男たちがならず者だったから。

カクリと肩を落とす。どうやら無駄な抵抗はせず、この状況において、私にとってマシな選択肢を選ぶしかないらしい。

「軟禁で、お願いします……」

「物分かりがよろしいですね。では軟禁ということで。あなたにお願いするのはひとつだけです。許可なしにここを出ないことです。わかりやすいでしょう?」
 「嫌になるほどわかりやすいです。……本当に、七百万円分働いたら、ここから出してくれるの?」

「ええ、もちろんです。後でお給料の話をしましょうね」

獅子島の狙い通り、というところなのだろう。『そう言うと思っていました』とばかりの態度が気に入らなくて、私は強がってみせる。

「私が大人しく軟禁されたところで、足がつかないとは限らない。明日警察が押し寄せてきても、知らないからね。私はそうなってほしいけど」

「それは怖いですね。ではさっそく、手筈を整えることにしましょう」

獅子島は余裕めいた表情で、おどけたように肩をすくめる。

「滝澤は曾我と一緒に、例の社長の居場所を探してください。黒部はフランチャイズの親会社に連絡を。桐谷は社長の内縁の妻という女を捕まえてください。私も所用を終えたら合流します」

獅子島が言い終わる前に、滝澤と曾我は出かけてしまった。最後まで聞いた桐谷は、ソファから立ち上がると、タバコを啜えたまま「リョーカイ」と返事をして部屋を出る。最後のひとり黒部はスマートフォンを弄りながら出ていく。

室内は静寂に包まれた。私がおそるおそる獅子島を見上げると、彼はにっこりと微笑む。

「さて、里衣が早く軟禁を受け入れてくれたことですし、さっそく私の部屋のご案内しましょう」

獅子島は土埃が積もった床を歩き、事務所を出る。照明のついていない真つ暗な階段を上る彼に、私は恐る恐るついていく。

「暗いので足元に気をつけてください。この上は私室だけで、誰かを招くこともなかったですからね。階段に照明をつけていないのです」

「はあ……」

やがて獅子島は、三階にある無骨なスチールドアを開いた。

一体この先はどんな部屋になっているのだろう。下と同じように汚かったら嫌だなあ、ゆっくり室内に入ってみたら、意外と普通の部屋だった。

しかし、酷くシンプルだ。打ちっぱなしのコンクリートの壁に、床は黒茶色のフロアリング。

部屋の間取りは二階の事務所と似ている。部屋の左角には、セミダブルのパイプベッドとパイプハンガー、黒いラック。向かいの角にはミニキッチンと冷蔵庫、小さなテー

ブル、椅子がふたつ。家具はそれくらいしかない、殺風景な部屋だ。ベッド側の壁には事務所と同じ磨り硝子の窓がある。カーテンはない。

「元々この部屋は、下の事務所と同じ造りになっていたのですが、生活しやすいように手を加えましてね。まあ、男のひとり暮らしですから多少使いづらいところはあるでしょうけど、慣れてください」

「あの、私がここで生活するのはいいですけど、獅子島さんもここに住むんですよね？」
「もちろんです。ここは私の住居なのですから」

ガックリと肩を落とす。ブラック会社に勤めていても、プライベートだけは平和だったのに。なぜ、突然見知らぬ男とふたり暮らしをするはめに陥っているのだろう。

「ベッド、ひとつしかないんですけど」

「ええ、何か問題が？」

問題ありありだ。この男は常識が欠如しているのだろうか。それともヤクザなんて職業の人に常識を求めるのが間違っているのか。

「あ、あの、せめて部屋を分けてもらいたいのですけど」

「残念ながら、この部屋しか生活に適していませんよ。そっこのドアの向こうは浴室やトイレですし、あちらのドアの先は私の趣味部屋になっていますので」

「……趣味部屋？」

獅子島が指さしたのは、ベッドがあるほうと真逆の方向。そこには黒いドアがあった。趣味。そういえばこの人、趣味に付き合えとか言ってなかったっけ。

私の思考を読んだように、獅子島はにっこり微笑んで私の手を握る。

「思い出しましたか？ そうです。あの先にある部屋は、あなたにとって無関係ではありません」

「つまり、あの部屋の中に、付き合ってほしい趣味のものがあるってこと？」

「ええ。少し大変かもしれませんが、そのうち慣れるでしょうし、最初は我慢してくださいね。できれば里衣にも楽しんでもらいたいですが、それはおいおいということ」

ふふ、と意味深に笑う。しかしその笑みは不思議と不安を煽る。

一体なんなんだ、獅子島葉月の趣味って。

「せっかいですから、見てもらいましょうか。多少ごちゃごちゃしてますが、もしあの部屋で生活なさりたいのであれば止めませんよ。一応ベッドもありますしね」

「……ベッド、あるの？」

趣味部屋に？ 頭の中が疑問符でいっぱいになる。

しかしベッドがあるなら、たとえ部屋が散らかっていてもいい。是非その部屋で生活させてもらいたい。

獅子島はドアノブに手をかけつつ、「そうだ」と思い出したように顔を上げた。

「里衣。私の趣味を教える前に、ひとつお願いがあるのですけど、よろしいですか？」
 よろしいですか、などと温和に問いかけているけど、私に拒否権はないのだろう。おとなしくコクリと頷くと、獅子島は優しく目を細める。

「ずっと言うタイミングをうかがっていたのですが、私のことは葉月と名前で呼んでいただきたいのです」

「な、なまえ？」

思わぬお願いに目を丸くする。獅子島は「ええ」と相槌を打ち、軽くため息をついた。

「実は、獅子島という姓は私の周りに何人かいますね。勘違いされることがないよう、呼び名を分けてほしいのです」

「はあ、そうですか」

「里衣とは自分の間、一緒に暮らす仲になりますからね。よろしいですか？」

ドアをキイツと開けながら、彼はあらためて問いかける。

「……まあ、名前を呼ぶくらい、構わないけど」

「ありがとうございます。では、こちらが趣味部屋になりますよ、里衣」

先に中へ入り、私を誘う獅子島。

趣味とは一体なんだろう。胸をドキドキさせつつ部屋に入ると、そこにはある種の異空間が待ち受けていた。

——なに、この部屋。

六畳ほどのこぢんまりしたそこには、先ほどの部屋と同じフローリングが続いている。暗く窓のない部屋。中に入った彼が電気をつけると、天井についているダウンライトが灯り、その『趣味部屋』の全容が目飛び込んできた。

……が、理解できない。

天井には、頑丈な鉄パイプが張り巡らされている。そこから鎖と金属フックが垂れ下がっていた。

そして奇妙な椅子がある。脚が床に固定されていて、椅子だけがクルクル回るようだ。そして足をのせるところが開いている。あそこに座る時は、自然と脚を開かねばならないだろう。

さらには、病院の診察台を思わせる黒いベッドが置かれている。ベッド脇には腰高のカウンターとガラス扉のついたキャビネットがあり、中には銀色に光る医療器具のようなものがいくつか並んでいた。まるで手術でもするかのようだ。

他にも用途不明なものがいくつかあって、奥の壁一面はクローゼットになっていた。殺風景なりビングとは一変して、確かにごちゃごちゃしている。

それにしても、一体何をする部屋なんだろう。まったく予想がつかないけど、嫌な予感だけはひしひしする。ここは勇気を振り絞って聞いてみるしかない。

「ちよ、ちよ、ちよちよちよ」

口が回らなくて、どもってしまふ。そんな私に、獅子島は変わらぬ調子で言う。

「落ち着いてください」

「ちよつと獅子島さん！ あの！」

「名前を呼んでくださいとお願ひしたでしょう？」

「は、葉月さん！ あの、これ、どういう……ここは何をする部屋なの!？」

「何をするって、この部屋を見てわかりませんか？」

わかりません。あと、理解したくありません。

完全に腰が引けている私を見て、獅子島、もとい葉月さんがふうむと腰に手を当て、顎あごに指を添える。その指が、すつと室内の一点を示した。

「例えばあれなんか、有名だと思いますよ。部屋の雰囲気はげに箔はくがつくかなと思って、インテリア代わりに買ってみたのですけどね」

ソロソロと彼の指さす方向に目を向ける。そこには、馬の形を模した乗り物が置かれていた。

まるで公園にあるバネの乗り物だ。しかし馬の顔はやけにとんがっていて、背の部分
が三角形になっている。そして足をのせるところや馬の頬の部分から鎖が垂れ下がって
いて、鎖の先には手錠ていじょうや枷かぎがあった。

おそらく、あれは三角の背に人を座らせ、手足を拘束するものではないだろうか。う
ん。使ひ方はなんとなく理解した。でも、そんなことをしたら、めちゃくちゃ痛い
よね？

私は身体を震わせながら、首だけを葉月さんのほうに向ける。

「あの……葉月さんはもしかして私を、ご、拷問ごうもんでもするつもり、なの？」

「拷問してほしんですか？」

ぶるぶるぶるつと高速で首を横に振る。されたくないに決まっている。

でも、あれもこれも拷問ごうもんするための器具にしか見えない。だってどの置き物にも手錠
や足枷あしかぎみたいなものが垂れ下がっている。

葉月さんは優しく目を細め、「冗談ですよ」と笑った。

「これが私の趣味なんです。私の趣味はですね、性調教なんですよ。あくまで趣味な
で、お遊びみたいなものですけどね。里衣、これからはどうぞ、私の趣味に付き合っ
てくださいね」

爽やかに歯を光らせ、優しい口調でとんでもないことを言う。

「あ、ちなみにここの器具はすべて新品です。私の趣味で改造しただけの部屋なので、
まだ誰ひとり入れたことがありません。安心してくださいね」

私は一体どう安心したらいいのだろう。葉月さんの言っていることがわからない。と

りあえず自分が大ピンチということはわかった。

いや、ピンチと言うのなら、私が接触事故を起こした時から、危険信号がピカピカと光っていた。

しかし今はそれを凌駕して、もっと具体的かつ真剣なピンチだった。

だって『調教の相手になれ』なんて、無茶ぶりにもほどがある。

そんなことは、絶対にやりたくない！

それに、ろくに知識も持たない私が、この人を満足させられるとも思えない。

「む、無理だよ。私、ズブの素人なんだよ!」

「知っていますよ。あなたがプロだったら、それはそれで驚きます」

くすくすと笑う葉月さん。どうしよう、どうやったら説得できるんだ。

「そうじゃなくて、私、こういう趣味ないし、そもそも興味もなかったから知識もないし。だから、あの」

「別に無理強いはしませんが、断るなら約束を違えたということ、あなたをお風呂に沈めますよ」

「……お風呂?」

キョトンと首をかしげると、葉月さんがニッコリする。

「性風俗店で働いてもらうということですよ」

「ぎえ!? で、でも、絶対無理だよ! だって、わかんないもん。こ、こんなとか、あんなのとか、使い方とか全然わかんないし!」

必死に椅子やベッドを指さして喚く私。しかし葉月さんは「え?」と意外そうに首をかしげた。

「使うのは私なんですから、あなたが使い方を覚える必要なんてありませんよ」

「ごもっともな言葉に、私は言い訳を失って口ごもってしまふ。」

「い、いや、そうかもしれないけど……何より、こんなの付き合えて言われても、付き合えないよ! わ、私、マゾじゃないし!」

調教されるってことは、鞭で叩かれたり、ろうそくを垂らされたりするんでしょう? そんなの嫌に決まっている。世の中には、そういうことをされるのが好きな人がいるらしいけど、私は違う。痛いのも熱いのも嫌だ。

それなのに、なぜか葉月さんはすごく嬉しそうに、満面の笑みを浮かべた。

「もちろん存じていますよ。逆にマゾに目覚めていたら困ります。全力で嫌がるから、楽しいんじゃないですか。泣きわめいて拒絶する相手を、無理矢理拘束して好き勝手するのがいいんですよ。やがて相手が快楽に目覚め、屈辱の中でオーガズムに達する瞬間、私はカタルシスを感じるのです。だから、里衣は私に遠慮することなく嫌がってくださいね」

な、何を言っているんだろう、この人は。彼の言葉は半分以上が理解不能だ。本当に、こんなオソロシイところで生活しなくちゃいけないの？

身体がガクガクと震え、半泣き状態の私に、葉月さんは菩薩のような微笑みを向けた。「どうしても辞退なさりたいのでしたら、それでも結構ですよ」

「で、でも、辞退したら、私は性風俗店に売られるんだよね？」

葉月さんは、事もなげに「はい」と頷く。なんてことだ。これは究極の選択である。性風俗店で金を稼ぐか、ここで事務職として金を稼ぎながら葉月さんの趣味に付き合うか。

はっきり言って、どっちも嫌だ。

しかしそんなことも言えずに、私はただただ震える。

すると葉月さんは、キャビネットを開き、黒い鞭を取り出した。葉月さんが振ると、鞭はピシッとしなる。

「せっかくですから軽くウォーミングアップをしておきましょうか。あなたのことも、ちゃんと知っておきたいですからね」

鞭の先を軽くしならせながら微笑む葉月さんは、めちゃくちゃ怖い。

あと、ウォーミングアップって何？ 調教用語？ 違うよね。

私はじりじりと葉月さんから距離を取り、ついに壁にべたりと張りついた。

「ああああああの、ほら、あの、い、今はちよつとつ、ほら、夜ですし！」

「ええ。これから夕飯を食べて寝るだけですから、丁度いいじゃありませんか」

言い訳のチョイスを間違えたらしい。私は慌てて方向転換する。

「丁度よくない！ あああ、あと忘れてたけど、ごはん食べたい！ お腹がすきました！」

「調教が終わったらごはんをあげますよ」

「ひい！ や、あの、ほら、桐谷さんたちが帰ってくるかもしれない……！」

「この部屋は防音になっておりますので、物音は階下に響きません。それから所員のことはまったく気にしなくて結構です。彼らは私の趣味を理解していますからね」

理解済み!? つまり私がこういう目に遭うことを知っているのか。恥ずかしい！

いよいよ逃げ場がなくなつて身体をこわばらせる私の前に、葉月さんがしゃがみこむ。そして下から覗き込むように私を見上げると、ツイットと胸元を、鞭の先でなぞってきた。

「さあ、そのベッドで横になつてください。まずはあなたの身体を『点検』させてもらいますよ。もちろん抵抗なさつても結構ですよ」

どうせ抵抗しても無駄なんだよね……

私は一分ほど悩んだ後、トボトボ歩いて黒い診察台——もといベッドに向かった。すべては自業自得なのだ。そもそも車をぶつけなければ、こんな悲惨なことにはならな

かった。

私はしぶしぶベッドに上がる。横になると、葉月さんが鞭を持ったまま近づいてきた。彼は満面の笑みで、私の頬に鞭をピタピタと当てる。そして「いい表情ですね」と満足そうに言った。一体私はどれだけ怯えた顔をしているのだろう。

「さて、では脱がしますね」

「ままだ、待って!？」

仕事着であるスーツの上着に手をかけられて、私は慌てて葉月さんの手首を掴む。眼鏡がきらりと光り、彼は嬉しそうな顔をした。

「なんででしょう。もしかして自分で脱ぎたいのですか？」

「そそそそんなわけないっ！ そうじゃなくて、な、なんで脱がすの？ 点検って、脱がないとだめなの!？」

「当然でしょう。脱がなければ、何もはじまりません」

まじか。ウォーミングアップの時点で脱がなくてはいけないのですか。

脱がないといけないと思うと、急に恥ずかしさの度合いが上がる。それになんだか怖い。

「つて、ああーっ！ すでに脱がされてる!!」

私がボヤボヤ考えている間に、葉月さんはスーツの前ボタンをはずし終え、ブラウス

のボタンまではずしていた。なんて手が早いんだろう。

慌ててブラウスの前を閉じようとすると、葉月さんはそれを制止するように、私の喉元にピタッと鞭を突きつける。

「駄目ですよ。隠してはいけません。そう、手を下ろして。次に抵抗したら、拘束しますからね」

「……うう」

力なくだらりと腕を下ろす。抵抗しても状況を悪くするだけだ。どうしても無視できない抵抗感があるけれど、私は必死にその感情を抑え込む。

すると、葉月さんがくすくすと笑った。

「この程度で恥辱を感じているとは、先が思いやられますね？ とっても楽しみです」

「っ、意地悪」

「ええ、そうですね」

葉月さんは細い鞭を手の内で回し、グリップをブラの下から差し込んだ。そしてグイッとブラを上にはずらす。

「ですが、意地悪とはまた、可愛い表現ですね。はじめて言われましたよ」

葉月さんが何か言っているが、それどころではない。

だって、胸が露わになっているのが、恥ずかしくて堪らない。

「ささやかな胸ですね。もしかしてAカップですか？」

「失礼な、Bだよ！　そ、それに、寄せて上げたら、Cカップのブラも入るから！」

「最近の下着は詐欺ですよねえ。黒部がガツカリおっぱいと名付けていましたよ」

黒部……あのホストっぽい茶髪男か。ガツカリおっぱいとはまた酷い名付けだ。

葉月さんの鞭がゆるりと動く。鞭とは本来打つものだが、葉月さんはどうやらそれで私を傷つけるつもりはないらしい。ただ、硬い鞭の先で私の胸をなぞっていく。線を描いたり、乳輪の形を辿ったりを繰り返す。

気づけば私はこぶしを硬く握り、フルフルと小刻みに震えていた。

「もっと力を抜いてもいいですよ。今日は点検だけですし、何もいませんから」

裸を見たり、鞭で胸を弄ったりすることは、私の認識では『何かしている』うちに十分入る。しかし、彼にとってはそうではないらしい。だとすると、点検が終わった後に何が待ち受けているのか——怖すぎて考えたくもない。

胸を鞭でつつき、本当に点検をするかのようにジツと凝視する葉月さん。

どうしても恥ずかしくて、顔を背けてしまう。

「色白ですね。乳輪も綺麗な色をしていますし、形もいい。乳首がやや小さいですね。ここだけは少し幼い感じがします」

ツン、と胸の先端をつつかれた。びくりと肩を揺らし、目をぎゅつと瞑る。

「感度は今ひとつですね。もしかして里衣は、自分でここを弄ったことがないのですか？」

「っん、ないよ、一度も」

「ふむ、開発してないのでですね。ここはいわゆる性感帯のひとつですよ。いくらでも気持ちよくなれる場所です。ほら、今も少しずつ気持ちよくなっていますか？」

「あっ」

っん、っん、と胸の尖りをリズムミカルにつつかれる。そのたびに肩が揺れ、我慢したいのに声が勝手に出てしまった。

「はっ、んっ……やあ……なんか、変な感じ。これが気持ちいい、の？」

戸惑いながら聞けば、葉月さんはわずかに片眉を上げた。そして鞭を持つのは逆の手で、じかに胸を触る。温かくて乾いた、大きな手。それが胸を覆い、ギュッと強く乳首を摘まんだ。

「いッ……！！」

痛いとか抗議したかったが、『次に抵抗したら、拘束』という言葉思い出して、言葉のみ込む。

「あなたは性感にまったく慣れていませんね。里衣の男性経験をお聞きしてもよろしいですか？」

「だっ、だんせいけいけん!? そんなのないよ!」
 「一度もないのですか?」

意外そうに目を丸くする。いや、まだ二十歳だし。この年なら、まだ一度も男の人と付き合ったことがないというのは、そう珍しいことではないと思うんだけど。

「一度もないよ。田舎から都会に来て以来、ずっと仕事が忙しかったから、恋愛なんてする暇なかったし」

「なるほど。健全でわびしい社会生活を送られてきたのですね。つまり里衣は処女ということですか?」

「しよっ……! ま、まあ、そう、だけど」

顔に熱が集まるのを感じながら頷く。なんでこんな恥ずかしい問答をしなくてはいけないのだ。

そもそも、調教に処女かどうかなんて関係あるのかな?

——その時、ニヤリと、葉月さんが薄く笑った。

それははじめて見る、酷薄で冷たい笑みだった。穏やかさや優しさなどの人間味の要素をすべて削ぎ落としたような、うすら寒い笑顔。

「ふうん? それはまた都合がよい……」

葉月さんが、きゅ、と乳首が摘まむ。そして親指と人差し指で擦りはじめた。

立ち読みサンプル はここまで

「初心うぶそんな娘だと思っていましたでしたが、まったくの未開発だったとは。これは調教のしがいがありますね。ゆつくりと身体に教え込み、性の快楽を覚えさせましょう」
 くすくすと笑う葉月さんの笑顔が怖い。

私は一体何をされて、どうなってしまうのだろう。得体の知れない不安が増していく。

「ほら、ここを擦ると気持ちがいいでしょう。この感覚を覚えてくださいね」

そう言いながら、葉月さんは私の乳首を擦り続ける。肌が粟立あわたち、ざわざわする気がするが、これが『気持ちいい』ということなのかは、よくわからない。

「ん、や……! 気持ち、いいっ? なんだか、不思議な感覚しかしいけどっ」

「ええ。そのうち自分でも擦りたくくなりますよ。乳首でイけるようになりましょうね。

ああ、これからのことを考えると、すごくわくわくします。処女を散らす前に、できればクリトリスとGスポットの開発まで済ませておきたいですね。たくさん感じられるように、がんばりましょう」

葉月さんがにっこりと笑う。その笑顔は冷たいものではなかったので、少しホッとした。

でも、知らない単語ばかり出てくるし、彼の言っていることはやっぱりわからない。

するすると葉月さんの手が動き、腰のくびれをなぞる。そして私の膝をぐつと持ち上げた。スカートがめくれ上がり、ストッキングを穿いた太ももが見えてしまう。